

「底が突き抜けた」時代の歩き方 356

「わたし」を置き去りにして ただひたすら暮れてゆく日本の戦後

戦後の日本人にバカが増えてきたことには、誰にも異論はないだろう。異論がある人は今日一日に出会った、とてもバカとはいいいがたい光景のいくつかとどこまで対話してみることができるか試してみればよい。今の日本がバカで満ち満ちていることは、ごく最近のこんな光景からも明らかである。アメリカがイラクを近々攻撃するのではないかという不安と恐怖と憤怒から、アメリカ本土ではもちろんのこと、アメリカの同盟国イギリスを筆頭に、ヨーロッパを中心にした反戦デモの渦が世界中で一千万人を越えたという報道があった。日本では東京で千人かそれを少し上回る人々の、整然とした、おとなしい行進がテレビに映しだされていた。それが、世界の中に置かれた今の日本の隠れもしない姿である。

行進への参加者数が西欧諸国と比較して、あまりにも少なすぎることをあげつらっているわけではない。参加者数が多ければ誇れるというものでもない。アメリカが本当にイラクを攻撃してしまうかもしれないという問題のなかに、極東に位置するちっぽけな列島に居住する私たちが目を大きく見開いて覗き込まなくてはならない切実な問題をたえず手にしながら生きているかどうかということが、あのショボイ行進のなかにくっきりと映しだされているということなのだ。世界で起こっていることに無関心である者が、自分が〈いま・ここ〉にあることへの関心を募らせる筈がないことはいうまでもない。かくいう私も行進に参加する者ではなかったが、一体なにが問題なのかについて思考を巡らすなかで、その思考に見合った身体表現の最も有効な動きについては絶望しながらも、模索はしている。

実はこの文章も＜アメリカはなぜイラクを攻撃しようとするのか＞という表題で書き進める予定であったが、まずその前にせめて「拉致問題」と同程度の高まりを一向にみせようとししない日本人の戦後における失語状況に一瞥しておかなければ、どうにもこちらの気分が収まらなくなってこの文章を綴っている。もう一つの、愚かで胸クソの悪い光景に言及しておこう。今年の1月29日付産経新聞に報告されていたが、奈良で開催されていた日教組教研集会の平和教育分科会での出来事である。《取材に行った産経新聞記者が会場で野次られ、吊し上げ同然の状態になった》のだ。この出来事については、『週刊文春』（03・2・13）のコラム欄で次のように取り上げられている。《さて当日（26日）、産経記者が分科会会場に入っていくと、20日の記事の中に取り上げられた東京教祖の女性組合員が記者を糾弾した。「報道でプレッシャーを感じている。産経新聞は（平和教育を）壊すために参加しており、記者が同席したのでは安心して発言

できない。そうしたことを皆で確認して退席させてほしい」というのだ。会場は拍手喝采。

次に記者の斜め後に座った別の女性出席者が「あなたでしょ！ 何か言ったらどうですか」と記者に返答・釈明を求めた。

会場の興奮した空気に押された司会者も「いったん出ていただけますか」と求めるので、産経記者は退席を余儀なくされた。「これ以上残ると危害が加わる恐れもあります。この後は本部で対応しますので」と司会者。「本部」の幹部が駆けつけた。教研集会は近頃「開かれた集会」を標榜^{ひょうぼう}している。気に入らない記者を追い出すのは、みずから自己の原則を破るものである。

間に入って困った幹部は、産経記者に「正確な報道をお願いします」と言った。おさまらないのは記者の方だ。「どこが不正確なのか、具体的に指摘すべきでしょう」と反問した。

幹部は「それを今この場でやるのかい。それに（今言われても）組織で決めてないから、個人的判断で今指摘はできないよ」と答えた。苦しい説明、喜劇的である。

その間さまざまあって、地元の奈良教組の二人に護衛されながら産経記者は午後の会議を取材できたという。》

このコラム欄に記されていることがどこまで正確かわからないが、もし大きなところで間違いが見出されるなら、日教組も黙ってはいないだろう。現時点では抗議も提出されてはいないようだから、大方のニュアンスはこのようなものであったのだろう。私もかつては日教組の組合員の一人であったから、今も昔と一向に変わらぬ日教組の集会にお馴染みの、ヒステリックな喜劇であるのがよくわかる。もちろん、当人たちは大真面目なのであろうが、真面目な無知ほど怖いものはない。文章の中の「20日の記事」とは、1月20日付で産経が《日教組の北朝鮮寄り姿勢を指摘する記事を載せていた》ことを指している。コラムは、《榎枝元文元日教組委員長の北朝鮮礼賛は、彼の著書から引用してあるが、常軌を逸したグロテスクなものである。》とのみいっているだけだが、かつての日共系教員や社会党系教員が「教え子を二度と戦場に送るな」と大声で叫ぶ一方で、北朝鮮の帰国事業を手放しで礼賛していただけでなく、積極的に在日の生徒の帰国を支援していたという事実を取り上げただけでも、組織の根幹を揺るがす大問題であることは間違いない。

日教組を容赦なく叩く産経を組合員が目の敵^{かたき}にするのはいつも通りだが、「報道でプレッシャーを感じている」というその報道が、もし「日教組の北朝鮮寄り姿勢を指摘する記事」であるなら、記者を糾弾した女性組合員は「報道でプレッシャーを感じている」場合ではなく、日教組に属していたかつての先輩組合員たちが教え子である在日生徒たちの北朝鮮への帰国を積極的に奨励していたという、拭い去ることのできない事実や、そのような日教組の体質は昔から少しも変わっていないということにむしろプレッシャーを感じるべきだったのだ。日教組の掲げる平和教育や民主主義といった理念がかつての自分たちの運動を徹底的に検証し直すことのないような空疎な単なるスローガンであったり、しかも産経記者の同席で壊される程度のものであったなら、問題は産経（記者）

にあるよりも、自分たちの掲げる理念がいかに空洞で無力なものであるかに気づこうとしないことのうちにあることを知るべきなのである。

コラムは、《日教組が実は教師の組合などでなく、単なる左翼集団ないし「朝日新聞愛読教師の会」であることを示す寸劇だった。／左翼は、記者にまず踏み絵を踏ませる。一つの批判に耐えられないほど、左翼は弱い。それは全体主義の弱さにも通じる。／左翼は、狙った餌食を取り巻き、確認→糾弾→謝罪→学習という常套手段によって異論を唱える者を弾圧する。》と続けるが、このような批判の仕方もまた、よくない。なぜなら、日教組が「単なる左翼集団」などではなく、フツの「教師の組合」であるところに根本的な問題が潜んでいるからだ。たとえ左翼系のゴリゴリの女性組合員による記者糾弾であっても、おそらくそれに「拍手喝采」する層の中にはフツの組合員も多く混じっていたらうからである。コラムがみるように、教研集会に参加するような熱心な組合員はフツの教師などではなく、教師の格好をした「単なる左翼集団」だとしても、日教組には教研集会や日常の活動などにも自分からは参加しないフツの教職員が数多く所属しているのであり、問題はニッポンのフツの国民がニッポン政府に対してそうであるように、日教組に所属するフツの数多くの教職員が、コラムが指摘する日教組の伝統的で全体主義的な左翼体質を沈黙のうちに営々と支えてしまっているところにある筈だ。

日教組の体質と同様に、コラムも偏向しており、左翼を全体主義と結びつけて、「確認→糾弾→謝罪→学習という常套手段によって異論を唱える者を弾圧する」という図式の中に自らを閉じ込めている。左翼的であることはどこまで自分的なるものを開いていくものであるか、つまり、自分的なるものをどこまでも開いていくことのなかにしかく左翼>は存在しないということを少しでも心得ている者なら、コラムが決めつける左翼とはスターリニズムであることがすぐわかる。いうまでもなくく左翼>とはスターリニズムと似て非なるどころか、似てさえいない。スターリンや毛沢東や金日成をく左翼>主義者と思い込んでいたり、彼らの言説をく左翼>的な言辞として未だに崇めたり、毛嫌いする人がいるなら、彼らが一刻も早く自分のつくった「開かずの間、から勢いよく飛び出すことを勧める。

本来なら、日教組は教研集会に普段から自分たちの見解と異にし、対立すらしている産経記者が取材のために同席しているのを歓迎すべきであった。けっして衝突し合わない意見の馴れ合いによって幕を閉じるのではなく、最大に見解の異なるマスコミの参加を大手を広げて受け入れるべきであった。自分たちの主張や運動のどこが批判の対象になるのか、自分たちの脆弱さはどこにあるのかを産経記者の参加を媒介して検証する必要があったし、その検証を通じて産経との相容れない体質にまで踏み込む必要があった。教研集会とは本来、そのような「開かれた集会」であった筈である。「開かれた集会」とは単に組合員以外の者が参加できるということだけではなく、そこで交わされるお互いの意見が受け入れ合う広さを備えて、より一層広げていく意見を各参加者がそれぞれ自分の懐中の奥深くに降ろしていく葛藤の連続ではなかったか。

日教組という組織がこれまで本当になにも考えてこなかった駄目な点が、「どこが不正確なのか、具体的に指摘すべきでしょう」と産経記者に反問されて、「それを今この場でやるのかい。それに（今言われても）組織で決めてないから、個人的判断で今指摘はできないよ」と幹部が答えるなかに、くっきりと浮き彫りにされている。「苦しい説明、喜劇的である。」とコラムが簡単に済ませるような問題ではない。この答弁のなかに日教組が未だに「個人的判断」が不在な組織を維持しており、そのような組織であることによってしか日教組が存続しえないという問題が顕わにされているのだ。もちろん、日教組のみならず、あらゆる組織が「個人的判断」の不在によって成り立っているのが現行かもしれないが、コラムの指摘する「全体主義の弱さ」とは実はいわゆる左翼系組織に該当するだけではなく、左右を問わず、「個人的判断」の不在によって成り立つすべての組織集団に該当する問題である。「個人的判断」の不在な組織とは具体的な個人が存在しない組織であるからだ。

考えてみるまでもなく具体的な個人の存在しない組織が成り立つ筈がない。ということは、どのような組織も「個人的判断」によって存続しているけれども、それは特定の「個人的判断」であって、それ以外の膨大な「個人的判断」は不在をしいられているということである。その特定の「個人的判断」が複数の場合にはイラク攻撃を推進しているアメリカ合衆国を想像すればよいし、単独の場合は主体思想を唯一体现している金正日の北朝鮮共和国やイラクを思い浮かべればよい。いずれであれ、あらゆる組織は特定の「個人的判断」によって運営、活動されていき、圧倒的多数の他の「個人的判断」は組織的見解と異なるという理由で沈黙を余儀なくされていく。では、特定のものではないどのような「個人的判断」も不在をしいられ、沈黙を余儀なくされるかといえばそうではない。教研集会のドタバタはそのことをも浮かび上がらせている。

産経記者に対する女性組合員の糾弾は明らかに組織決定に基づかない、個人的感情の爆発であり、「個人的判断」以外のなにもものでもなかった。「産経新聞は（平和教育を）壊すために参加」しているので、「皆で確認して退席させてほしい」という発言は、本当は教研集会そのものの進行とはなんら関係のない「個人的判断」であつたにもかかわらず、特定の「個人的判断」と同義のように取り扱われていったのは、彼女の「個人的判断」が会場の「拍手喝采」を招来していたからだ。つまり、彼女の「個人的判断」は参加者全体の「個人的判断」でもあつたということである。それでも会場全体に支持された彼女の「個人的判断」が、特定の「個人的判断」に基づく組織的方向性と背くなら、彼女の「個人的判断」は暴走として制止され、鎮静化させられることは間違いなかった。しかし、分科会の司会者が産経記者に退席を求めたとき、彼女の「個人的判断」は組織的判断として認められ、特定の「個人的判断」と同調していたといえる。

ところで、女性組合員の産経記者に対する糾弾は本当に彼女の「個人的判断」だったのだろうか。確かに彼女が口火を切ったという点では、彼女の「個人的判断」であつたかもしれないが、「報道でプレッシャーを感じている。産経新聞は（平和教育を）壊す

ために参加しており、記者が同席したのでは安心して発言できない。そうしたことを皆で確認して退席させてほしい」という発言内容を吟味してみると、その個人的発言は主催者である日教組本部による糾弾であっても別に不思議ではなかったという意味で、彼女の「個人的判断」は日教組の考え方を正直に読み取ったものであったと考えられる。

「開かれた集会」を標榜する教研集会の運営者たちが産経記者の退席をあからさまに求めることのできない建前を、彼女の自発的な「個人的判断」が押し通してくれたといえなくはない。実際、その発言内容は「個人的判断」を仮装した組織的観点に貫かれたものでしかなかった。

司会者の「これ以上残ると危害が加わる恐れもある」という警告についていえば、産経記者は本当は危害が加えられるまで居座るべきだったと思う。もしそうなったなら、本当の意味で教研集会が問われ、教職員たちはこの集会で一体なにを論議するために、全国から集まってきているのが一挙に露呈されてしまうにちがいないからだ。その意味で産経記者は一步も引かず、身を挺する必要があった。「地元の奈良教組の二人に護衛されながら産経記者は午後の会議を取材できたという」オチでは、どうにも締めりがなかった。文春コラムは『新聞不信』欄であり、《世の新聞記者諸君に問う。奈良で同僚記者の取材の自由が侵害され、それは日教組による白昼公然の憲法違反行為なのに、なぜ諸君は一行も報じないの？》と最後を締め括っている。

簡単な粗描で通過するつもりであったが、これは本当は日教組批判でもなければ、組合員批判でもない。批判にみえるかもしれないが、批判することに意味があるとも思われない。教研集会の光景でやはり引っかかるのは、「産経新聞は（平和教育を）壊すために参加しており、記者が同席したのでは安心して発言できない。」という糾弾の仕方であり、それが「拍手喝采」を招来するという光景についてである。産経記者の参加によって壊されるような「平和教育」を論じること一体なんの意味があるのか、という一片の内省もここにはみられないし、記者が同席しただけで「安心して発言できない」などと臆面もなく言い放って「拍手喝采」を招来する光景のどこに、「平和教育」を命がけで守り通す気概や志はあるのか。全くプレッシャーを感じない、密閉された安全圏で論じられるような平和教育などなんの役にも立たないことに気づこうとしない、甘やかされて困った精神が戦後の荒れ地にはびこっているという以外にない。

少し前に話題になった『からくり民主主義』（草思社）の著者高橋秀実は終章で、あるテーマについて本や記事について一通り目を通して準備をし、専門家などに話を聞いてテーマの輪郭を掴んで、いざ現地に赴くとたちどころに「わからなくなる」という困った状態にたびたび直面することを記している。現地ではほとんど取材拒否をされたことはなく、マスコミに話し足りなかった様子で「実は……」とえんえんと世間話やウワサ話の如く話をしてくれ、《ひとりずつ話を聞く度に「それはわかる」と納得し、納得と納得が重なり合って、全体がわからない、という状況に陥》った結果、著者はひとつの仮説にたどり着く。

《本書のタイトル、『からくり民主主義』とは「からくり民主主義」です。「からくり一民主主義」ではありません。つまり現代の日本、あるいは戦後の日本に本当の民主主義がない、という意味ではない。「本当の」とは理想であり、「べき」なので、私にはあずかり知らぬことです。

からくり民主の「民」は「みんな」です。「みんな」が主になるのが「民主」。よく選挙などで、政治家が「国民が主役です」などと連呼しているお決まりの考え方です。聞こえはよいが、これには矛盾があります。全員が主役になると主役はいないのと同じだからです。そこで「からくり」が必要になるのです。

一人ひとりとは別に「みんな」をつくって、それを主役にするのです。テレビ局や新聞社が躍起になって世論調査をするのも、「みんな」をつくるためです。「世論」「国民感情」「国民の声」などと呼ばれるもので、こうして主役を固定し、自分たちはその「代弁」という形で発言するのです。要するに、「みんな言っている」「みんな思っている」と後ろ盾を用意するわけです。「誰が何と言おうが……」という発言は自分勝手、と排除されますが、「みんな」を主にすれば、怖いものなしです。「みんなが嫌っている」と広げれば本当に嫌われ者が誕生するように、政治、マスコミから世間話に至るまで、日本人はとても「民主」的なのです。》

《理想を語るということは、同時に、それが叶えられていない「みんな」をつくります。例えば「平等」。事情は人それぞれ、と思っていれば関係ありませんが、「平等であるべき」とされた途端、そう思っていた人も「不平等」な存在になります。人は不平等だから平等を求めるのではなく、「平等であるべき」だから「不平等」になり、ひるがえって「平等」を追い求めるようになるのです。こうして理想から逆算されて、「みんな」はつくられてゆきます。そして果てには、永遠に満足できない純粹無垢な「みんな」という主が出来上がってゆくのです。

そんな「みんな」がどこにいるのか？ と歩いて探してみてもムダです。「みんな」は心の中にいるからです。憲法にある「人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚する」とはそういうことです。

本書はこのからくり民主主義の下、つまり「みんな」の脇役になった日本人を描いたものです。

置かれた立場は同じなのですから、そこにあるのは対立ではなく、ズレだけです。現地で私がわからなくなったのは、テーマが生み出すプレーンな「みんな」と一人ひとりが語る「みんな」がズレているからです。ズレとズレが織物のように重なって、糸口が見つからないのが「からくり」たるゆえんです。》

著者によれば、「からくり民主」とは本当はどこにも存在せず、一人ひとりの心の中にしかない抽象的、観念的な「みんな」を後ろ盾にして、自分たちはその「みんな」を代弁する形で発言したり、行動することにほかならない。「民主」とはその「みんな」であって、それぞれに異なる「みんな」を心の中に持っている一人ひとりだけあって主

役ではなく、「みんな」の脇役にすぎないのである。端的にいうなら、自分の「個人的判断」を個人的判断そのものとして口にしたたり、提出するなら、たちまち「自分勝手、と排除され」てしまうけれども、同じ「個人的判断」であっても、「みんな言っている」「みんな思っている」と後ろ盾を用意すれば、周囲はその「みんな」が被さった「個人的判断」をむげに排除したりはしないということなのだ。なぜ、排除しないのか。「みんな」を仮装した「個人的判断」に耳を傾ける振りをするのも、一人ひとりの心の中にある「みんな」であるだろうからだ。

どこにもいない嘘の「みんな」を主役にした民主主義が日本の戦後社会に流通してしまったことを、著者は「からくり民主主義」とみなしているだけで、表面的には批判しているわけではないが、一人ひとりの「個人的判断」がそのまま尊重され、主役になるような本来の民主主義は戦後の日本にはけっして根づかなかった、ということが示唆されている。いうまでもなく「からくり民主主義」がいいわけではないし、「からくり民主主義」に覆われた日本の戦後社会が風通しのよいものである筈がない。なにより「みんな」を後ろ盾にしているかぎり、個人も「個人的判断」も成長しないからだ。いや、個人以上に単独者といった観念そのものが育まれる余地がなくなってしまう。個人にとっても単独者にとっても、「みんな」を突き抜け、「みんな」から剥離しないかぎり、それらの観念は育たない。

この「からくり民主主義」の中に先の女性組合員による産経記者糾弾の光景を置くと、「からくり民主主義」のもつ意味もよくみえてくるにちがいない。彼女が発した、「報道でプレッシャーを感じている。」ことも、「産経新聞は（平和教育を）壊すために参加しており、記者が同席したのでは安心して発言できない。」ことも、彼女自身の個人的感覚であり、「個人的判断」でありながら、`私がそう思っている以上にここにいる「みんな」がそう思っている筈だ、いや、`「みんな」がそう思っていることを私が代弁しているだけだ、といったニュアンスがこちらに強く響いてくる。だから、`私はそう思うが、皆はどう思うか、といった呼びかけを省略して、「そうしたことを皆で確認して退席させてほしい」と自分の願望がためらうことなくストレートに押しだされていったとみられる。「退席させてほしい」と思っている自分は「みんな」の中の自分であるから、「拍手喝采」は予期されているといった自信まで響いてきそうであり、そして当然の如く彼女の中の「みんな」は会場を埋め尽くしている「みんな」を引き出し、合流しあって「拍手喝采」へとなだれこんでいくことになったのだ。

自分の心の中で想定されている「みんな」を当てにしなければ、自分の「個人的判断」は外へ向かって表出していくことが困難だと誰にも思われている「からくり民主主義」が、「わたし」も「あなた」も皆一緒という、戦後社会の均一化された意識からもたらされていることは明白である。「わたし」と「あなた」は一致する部分以上に、異なる部分のほうが大きいにもかかわらず、一致する部分を肥大化させて、そのなかに「わたし」と「あなた」を安住させたいという願望がいつしか募らされてしまうことになった

のだ。一致する部分の肥大化された幻想が「みんな」であり、その「みんな」の中に「わたし」も「あなた」も申し分なく収まっている筈だから、当然「みんな」の外には世界がない。「みんな」はどこまでも「みんな」であるから、「みんな」を持たない「個人的判断」がいきなり押し出されてくるなら、「みんな」を無視した独り善がりの発言として排除されていくのである。

この「みんな」が日本の戦後社会においてどれほど顕著なものであったかは詳らかではないが、高橋秀実の仮説のように日本の戦後社会における「からくり民主主義」として大きくかたちづくられてきたことはいうまでもない。「からくり民主主義」の主役はどこにも存在しない「みんな」であるから、畢竟無責任の大系にほかならない。責任を取るべきなのは「みんな」であって、各自の「個人的判断」は「みんな」を代弁しているにすぎないからだ。では、誰も責任を取らない「みんな」が横行するなら、つまり、「からくり民主主義」が社会を覆ってしまうなら、一体、どうになってしまうのか。作家の片岡義男が『文学界』（03・2）で、「平成の15年間」という特集に因んで次の感想を述べている。

《危機意識、問題意識、当事者意識、責任、使命感、達成への意欲の致命的な欠如、その任にあらずその器でもない人たちが要職を既得権益のようにしていること、問題の存在を認めない、無視する、すり替える、言い逃れる、小手先や対症療法に終始する、後手にまわりつつ小出しにする、出来上がっている構造を変えようとしめない、世界的でしかも本質的な大変化の潮流が読めない、なんとかなるだろうと根拠なくごまかしながら流されていく、といったことすべて含めて、僕はここで先送りという言葉を使う。

平成の15年間がなぜこのような先送りの15年となったか。その理由や原因は、身も蓋もなく、考える力を人々が失ったことがもはや決定的となったからだ。考える力を失うとは、問題の存在がそもそもわからない、ということだ。いまの自分たちが拠って立つシステムの、どこにどのような問題があるのか、まともに見るならすぐに見えるはずなのに、それが見つけ出せない。問題が見えないのだから、問題を認識することは出来ない。

当然のこととして、別になんともない、このままいける、という方針を踏襲するほかなく、不都合はその場しのぎで先へ送るか、見て見ぬふり、あるいは無視するといった、問題などいっさい存在しないとしてしまう便法によって生み出される幻想のなかを、生きていくことになる。問題を見つけてそれと正面から向き合う気概や体力、目的意識などないから、どんな問題があってもなにもしない。出来ることがあるならそれは目先をごまかすだけだから、時間の経過とともにすべての問題は重症化していく。》

「からくり民主主義」に乗っかって「みんな」が生みだしてきた問題や、行き着く先がまとめて明瞭に記されている。なぜ、こんな事態になってしまったのか。「考える力を人々が失ったことがもはや決定的となったからだ」。ではなぜ、人々は考える力を失うことになってしまったのか。考えなくとも、これまでやってこれたからだ。というより、考えないほうがうまくやっていけるように思われてきたからである。人々が「考え

る力を失う」ことに「からくり民主主義」は大きく貢献してきている。どこにも存在しない架空の「みんな」はけっして考えたりはしないからだ。考える主体は主人公の「みんな」ではなく、「みんな」を代弁している「わたし」にほかならないけれども、「わたし」はつねに脇役にすぎないので、考える主体でありながら主体たりえない。そうして「みんな」が繁盛する陰に隠れて、「考える」こと自体が衰退していくのだ。

「からくり民主主義」の特徴として無責任の大系以外に、したがって「考えること」をしなくなったことが加わってくるが、片岡義男は経済活動に収斂していった日本の戦後状況をこう俯瞰する。

《唯一にして至上の命題だった経済活動は、戦後の日本ではほぼ極限まで営まれた。林立した企業群がこれを支えて受け持った。だから戦後の日本は経済であり、経済とは企業だから、日本の社会は企業のなかにのみこまれ、企業の内部こそ社会であり、その外にはなにもないという、おそろしくいびつに偏った過剰が、社会の常態となってあらゆる細部まで浸透した。教育はその典型ではなかったか。学校の日々を終えるとその翌日には、企業内部の最下層に取り込まれ、そこから社内階層の上部に向けて、その社内だけでしか通用しない刷り込みを徹底して受け続けるという異常事態の維持が、戦後の日本でおこなわれた教育の、基本方針だった。》

「日本の社会は企業のなかにのみこまれ、企業の内部こそ社会であり、その外にはなにもないという、おそろしくいびつに偏った過剰」について、「からくり民主主義」の「みんな」の過剰と照らし合わせると、各個人は「みんな」のなかにのみこまれ、「みんな」の内部こそ個人であり、「その外にはなにもないという、おそろしくいびつに偏った過剰」として重なり合ってくる。つまり、各個人として戦後の経済活動を支えていたのではなく、企業のなかにのみこまれた「みんな」のなかの一員として企業活動を支えていったということだ。

《戦後の日本はこれによって立ち直った。その後の経済大国という位置も、こうした技術によって獲得した。だから戦後の日本が誇っていい一人称は、実証に人生を賭けた技術者たちそれぞれが使う、「私」という一人称だ。実証のためにあらゆる知恵や工夫を注ぎ込む。その営みを土台の部分で支えるのは、目標の達成に向けた熱意や誠意といったものだ。こうした確かな裏付けのある「私」が、国ぜんたいを持ち上げ続けた。これも偏った過剰のひとつの形態であり、その形態のなかには、一生のあいだなにひとつ実証することのない、圧倒的な多数の「私」がかかえ上げられた、という現実がある。社会的に機能する技術は、それが高度に開発され広範囲に応用されればされるほど、なにも考えないままに自分意識だけは不当に肥大させた人たちの生活を、支えてしまうことになるようだ。》

「実証」とは確かな技術によってより多くのすぐれたものが製品化され、一般市民に受け入れられていくことであり、NHKの『プロジェクトX』を思い起こせば、すぐわかるようなことだ。問題は、経済大国としての日本の土台の部分を支えるために、「目標

の達成に向けた熱意や誠意」を注ぎ込んできた「私」であり、その「私」のなかには、「一生のあいだなにひとつ実証することのない、圧倒的な多数の「私」がかかえ上げられた、という現実が」あり、「私」と一体化した「社会的に機能する技術は、それが高度に開発され広範囲に応用されればされるほど、なにも考えないままに自分意識だけは不当に肥大させた人たちの生活を、支えてしまうことになる」。このような「私」とは自分自身を捨ててきた「無私」としての「私」ではないか、と作家の古井由吉は『すばる』の座談会（03・1）で指摘する。

黒井千次の『時間』の、自分の意に反する会社へ入った左翼である主人公が、「『ここにいるはずのない自分がある。ここにいるより他はない。せめてしっかりと企画を立てて提示して推進させよう』と考えますね。この考えは、日本経済の推進力の一つでもあった。ここには勤勉哲学があるんだね。自分があるべきところではないところにいると、勤勉になるんです。』《その勤勉の中に、「無私」ということが混じっていますよ。ここにいるべきではないけど、でもいるということの証のために勤勉になるんです。これは他の国の経済人や権力者がもつのは、違った種類の無私だね。》《高度経済成長の中では、脂ぎった物欲が盛んな人間や、出世欲の盛んな人間が押してきたように見えるでしょう。実は、そうではない。中堅どころの勤勉さも大きくあったんです。でも、それが今いろいろと、新しい問題になってきているね。》《それは何かを捨てることによって成立している。簡単に言うと、自分自身を捨ててしまう危険がある。》

古井由吉の発言を順にピックアップして並べると、以上のようにつながる。「からくり民主主義」でいうと、自分の心の中に「みんな」を作りだした一人ひとりとは結局のところ、その「みんな」のなかに自分自身を打ち捨ててきたではないか、ということだ。逆にいえば、自分自身を打ち捨てることによって、自分の心の中に「みんな」を作りだしてきたのではなかったか、ということだ。古井由吉の発言でハッとさせられるのは、ここにいるべきではない場所の中で戦後の日本人は勤勉さを発揮して、経済大国としての日本を支えてきたけれども、勤勉さを発揮してきた場所の中には自分自身が含まれてこなかったから、その場所から離れた老後の自分のなかにはなにもない、ということにやがて気づくことになるという寂しさであり、ある意味での残酷さである。

つまり、戦後空間のなかに自分があるべき場所をどれほど作りだしてきたか、その場所を作りだすことにどれほどの勤勉さを発揮してきたのか、という問いかけが響きわたっている。自分自身を打ち捨てることに勤勉であり、熱心であったということは、いかにせつせと廃墟をかたちづくってきたのかということにほかならない。しかしながら、そのことに気づいたときには、すでに老境の身であり、自分自身が廃墟と化しているという悲哀が彼の発言を貫いている。彼はまた、このような発言も行っている。

《僕はマネーが言葉を奪っているという考え方です。マネーが貧困とつながって、切ない切ない物である限りは言葉を奪わない。けれども、今のようにマネーが持ち主である主体さえ支配してしまう圧倒的な力になった時に、これは言葉は要らなくなってしまい

ますよ。日本の経済成長も、利潤本位で数字を上げることだけを進めてきた。その利潤に至るまでの経緯やそこから派生する影響を言葉にする必要はなかった。だから、言葉が退化してきた。

井上（ひさし）さんは、ギリシャ人やローマ人が文法を重んじたということを言われました。これは、大もとに議会や裁判があり、そこでの議論や詐術があるからです。しかし今や、議会の議論や詐術がはたして言葉になっているのかどうか……。》

《裏でマネーというものの優位、劣勢がずいぶんと働いている。そうすると、経緯や経過を説明する必要はなくなってくる。勝負は最初から決まっている。あるいはすぐ出るから、人は言葉を失ってきている。》

言葉に対して敏感な文学者らしい見方であるが、「からくり民主主義」では、言葉を発する主体である「わたし」は脇役として、主役である「みんな」の代弁者の位置を作りだしていたが故に、「みんな」が発している言葉のなかに「わたし」の言葉は呑み込まれて、言葉は退化し、言葉を失っていく状況に見舞われざるをえなかった。古井由吉はマネーが言葉を発する主体である「わたし」を支配する方向から、同じ問題を照らしだしているのだ。言葉を発する主体である「わたし」は自分の心の中では幻想の「みんな」に支配されることによって、他方自分の心の外ではマネーに支配されることによって、言葉を失う状況に直面している。自分自身を打ち捨ててきて、言葉を失ってきて、それを繰り返すうちに人々の時間も暮れて行き、日本の戦後も暮れていくといったイメージが闇の中から浮かび上がってくる。

古井由吉は毎日新聞（02・11・6）紙上の、松浦寿輝宛ての書簡を仮装した文章の中で、24年後に帰国した5人の拉致被害者における「失われた時」に思いを馳せながら、《我が身のほうに何か、居ながらの不在のようなものを、やはり「失われた時」を感じさせられはしないか》と自問して、こう書いている。

《時に自分を見失う。それが急激に起きれば狼狽^{ろうばい}になる。今の自分が自分でわからなくなったと感じているわけですが、まるで人の失踪^{しっそう}に、もうひさしいことははずなのに、いまさら驚愕^{きょうがく}しているようなところがある。尋ね人の心です。尋ねているつもりが、自分のほうこそ、その行方と存否を尋ねられている。背後に気配がぱったり絶える時、失踪するのは当人です。これでもずいぶん早足で来てしまった、という悔いが私などにはあります。しかし私一個のものとは限らず、時代の早足のようでもあります。》

拉致被害者にとっての「失われた時」は、戦後を生きてきた我々もまた、自分を見失っていく戦後のどこかへ拉致されてしまった者たちであることを照射し、我々にとっての「失われた時」をも問い尋ねていることを、その記述が気づかせてくれる。だが、「失われた時」のなかでも否応なしに時は暮れて行き、戦後そのものも我々と同様に高齢化して、自問が老いに背後から差し迫られていきつつあるのを感じている。どうやら日本の戦後の疲労は、我々を回復不能な彼方へと追い詰めて止まないようだ。

2003年2月23日記

